血清電解質異常で発症したラトケ嚢胞の病態

○小川 欣一[1]，池田 秀敏[1]，清水 宏明[1]，藤原 悟[1]，冨永 悌二[2]

広南病院 脳神経外科・東北療護センター [1]，　東北大学大学院医学研究科神経外科学分野[2]

従来剖検例で偶然発見されることの多かったラトケ嚢胞であるが、近年発見頻度が急速に増加している。これは、高解像度の MRI の臨床導入による効果が大きいものと考えられているが、同時に経蝶形骨洞手術技術の発達により臨床症候学と組織学的検討双方がリンクしたことが病態の理解を進めたことにもよる。しかしながら、一層の円柱上皮を有する良性腫瘍であるにも関わらずその病像は多彩であり、内分泌学的な合併症による長期予後は必ずしも捗々しくない。今回我々は、1991 年４月から 2005 年４月までに東北大学、並びに広南病院にて手術を施行し診断が組織学的に確定した Rathke's cleft cyst128 例中、低ナトリウム血症を始めとする血清電解質異常で発症した 8 例を対象に、発症までの臨床症候、下垂体ホルモン基礎値、画像診断及び組織学的な特徴等に関し検討を加えたので報告する。